

## はじめに

スリランカでは、1983年から2009年まで内戦状態にありました。内戦は北・東部に限定されていたのですが、セキュリティ検査は頻繁におこなわれ、まず空港で、コロombo市街地の入口で、ホテルの入口で、ショッピングセンターの入口で、と至るところでチェックを受けていました。ただ、コロomboやキャンディでの生活は一見平穏で、人びとは普通の生活を送っているようでした。

みんな長引く内戦のせいで感覚が麻痺しているのか知らん、と考えつつ私はコロomboで安穏と暮らしていました。しかしあるとき、バスでやたらに落ち着きのない女性と隣り合わせました。そのとき私は、もしかしたらこの人は服の下に爆弾を巻いていて、自爆テロに向かう途中なのかもと、怖くなり、目的地の手前でしたが慌ててバスを降りました。少し前に女性の自爆テロ事件があったからです。今考えれば、その女性は家族が急に入院したと知らせを受けて病院に向かう途中だったのかもしれない。自爆テロが発生するかもしれない町に住む、というのは、こういう不安がつきまとうものなのだとそのときようやく実感したのです。

もちろん、現在はこんな心配はいりません。安心して外出できます。海外からの観光客も増えました。大型の観光バスから欧米人観光客が押し出されてくる光景をみるようになりました。内戦時にはマイクロバスがせいぜいでした。キャンディ湖を見下ろすことのできる道沿いは、新しいホテルが雨後の竹の子のように建ちはじめました。

この本は、内戦と内戦にまつわる不安から解放されたスリランカについて、とくに経済について理解していただくためにつくりました。なぜ経済かという、内戦終結後のスリランカ中央銀行が発表する数字は、私の知っているスリランカとはちがう国なのではないかと疑うレベルのものだったからです。内戦が終了したスリランカで一体何がおこったのでしょうか。

また、内戦後のスリランカは、これまでスリランカを知らなかった人た

ちからも関心をもたれるようになってきたようにも感じていました。スリランカは人口約2000万人、北海道ほどの小さな国ですが、多様性に富んでいます。経済についても同様です。熾烈な価格競争しれつのなかでスリランカのような資源のない国がどうやって生き残っているのか、人的資源は優れているらしいけれども、労働市場や労使関係はどうなっているのか、内戦の原因となった民族問題はどうなっているのかなど、この本がスリランカを知るうえでのひとつのきっかけになってくれればうれしいです。

スリランカの人口統計書などで用いられる区分 (Urban, Rural, Estate) は「都市部、農村部、農園」などとよく訳されます。本書では、このうち Rural に当たる部分を「郡部」と訳出します。なぜならスリランカの都市部は昔からある中核都市を含む自治体を意味しており Rural は、「中核都市を含まない自治体」という意味しかもたないからです。したがって、Rural といっても必ずしも田園風景が広がっているわけでもないし、住民のほとんどが農民というわけでもありません。都市近郊のベッドタウンでさえ Rural に分類されている場合もあり、実態と名称がかけ離れているのです。ただし都市部と地理的・経済的に明らかに異なる地域を叙述するには農村を用いています。

2016年3月  
研究会主査